

イラクの子どもを救う会

ニュース

発行：イラクの子どもを救う会 発行人：西谷文和
 〒565-0824 吹田市山田西 2-19-14
 TEL 06 (4864) 1828 FAX 06 (6875) 8980
 E-mail : nishinishi@r3.dion.ne.jp URL : http://www.nowiraq.com/

No.23

May. 2010

アフガンに行つてきます

このニュースがみなさんのお手元に届く頃、つまり5月末に私は5度目のアフガン入りを敢行する予定です。まず首都のカブールに入り、避難民キャンプを訪問し、みなさんからいただいた募金で食料や医薬品を配布します。6月から9月頃まで、アフガンは暑い夏を迎えますので、衛生状態が悪いキャンプではいろいろな病気がはやりま

す。ですからどんな医薬品が一番求められているか調査を行った上で、できるだけ多くの避難民家族に行き渡るように配布しなければなりません。通訳もキャンプの代表者も、救援物資の配布については場数を踏んできましたので、混乱なく配布できるだろうと思います。カブールでは、劣化ウラン弾の被害者について、取材をするつもりです。前回訪問したインディラガンジー子ども病院の副院長が「間違いなく劣化ウラン弾の影響と思われる、がんの子どもが急増している」と証言しましたし、実際に小児がん病棟には、多くの子どもが入院していました。

カブール以外の街については、治安状況もあるので、情勢を見ながらの判断になります。米軍がこの夏から3万人を増派し、南部の拠点であるカンダハール州を集中攻撃するよう

です。カンダハールには2度行きましたが、イラクのファルージャのようにならないか心配です。アフガンでも進んでいるのが「戦争の民営化」。カブール市内にある日本大使館を警備しているのは、「アーマーグループ北アメリカ社」。昨年10月に岡田外務大臣がカブールを電撃訪問されましたが、その際に警護に当たったのは「コントロールリスク社」。あの悪名高き「ブラックウオーター社」もいます。



「カンダハール空港は軍民共用で、大規模拡張工事が進行中である」
(飛行機内から隠し撮り)

民間軍事会社の兵士であふれるカブールの街を見ていると、つくづく「戦争は儲かるのだな」と感じます。普天間の基地は住宅密集地に隣接していますが、カンダハール



「明らかに脳に異常を来している。劣化ウラン弾の影響か？」
(カブール市内インディラガンジー子ども病院にて)

そんなカンダハール空港は、空港拡張工事の真つ最中でした。3万人もの米兵増派は、このカンダハールに送り込まれます。したがって新たに受け入れる米兵のための基地と、軍事作戦用の空港を拡張しているのです。基地本体はペンタゴンから出る軍事予算かもしれないませんが、基地にアクセスする道路や上下水道、電線などは「アフガン復興費」から出ているのではないのでしょうか？

日本が負担する50億ドルも、このような「基地周辺整備費」に充てられかねません。そうなれば、日本は沖縄でもアフガンでも「金づる」として使われることになりそうです。もちろん、普天間基地やキャンプシュワブから、イラクやアフガンに兵士が派兵されているので、その意味でも、日本は加害者であります。アフガンから帰国するのは6月後半になります。次号で最新のレポートができるように、慎重にかつ大胆に取材してきます。

誤爆の実態

現在4作目のDVD、仮称「GOBAKU」を作成中。アフガニスタンで、「動物狩りのように」上空から空爆され、焼かれ、殺戮されている人々にスポットを当てようと思った。寒い冬、ただ薪を拾い集めているだけなのに、上空の米兵には「タリバンが爆弾を埋めている」ように見えてしまう。

あるいは村に武装勢力がいて、上空を通過する米軍機に発砲したとする。すると米軍機は、村ごと空爆を仕掛けてくる。

一般の刑事裁判では「疑わしきは罰せず」であるが、戦争の場合、「疑わしきは片っ端から撃て」である。

結果、多くの農民、女性、子どもたちが誤爆されているのは、みなさんご存知の通り。アフガニスタンでは、そのような誤爆が9年、イラクでは7年続いているのだが、ここへ来て、「誤爆のスタイル」に変化が出てきた。それは…。

無人機による空爆が急増

「戦争の無人化」である。オバマ政権になって、特に増



プレデターにはミサイルが2基搭載されている

えているのが、無人戦闘機による空爆。写真のような「プレデター（捕食者）」や「リーパー（死神）」と呼ばれる小型の飛行機で空爆するのだ。

このプレデターやリーパーには、ミサイルを二基搭載することができ。そのミサイルの名は「ヘル・ファイヤー（地獄の炎）」。

ではこの無人機を操っているのは誰なのか？

テレビゲームのような戦争

それはアメリカ本土、ラスベガス近郊にあるクリーチ空軍基地に勤務する空軍兵士である。

テレビ画面に映った「不審な人物」を、地球の裏側、アメリカ本土から空爆する。

どうしてそんなことが可能なのか…。それは米軍が宇宙に打ち上げた軍事衛星。地上3万キロ上空を周回する軍事衛星が、プレデターのとらえた映像を、アメリカ本土に送信する。かくして「テレビゲーム」のような「本当の戦争が、繰り広げられる。」

朝9時、クリーチ空軍基地に出勤した兵士は、仲間と冗談をかわしながらテレビ画面の前に座る。午前中はイラクを空爆。アルカイダのような人物がいる。よし撃て！

午後はアフガン。タリバンの拠点を発見。ミサイル発射！午後5時、一日の勤務を終え



赤外線カメラで地上を撮影

軍事衛星でアメリカ本土へ



た米兵が、ラスベガスを横目に、自宅へ。最愛の妻と子どもが父を出迎えてくれて、一家団欒。何気なくテレビのスイッチを入れたら、アナウンサーが「本日、アフガニスタンのカンダハールで米軍による空爆があり、タリバン兵が10数名死亡した模様です」。空爆を実行した兵士が、自宅でそのニュースを見る。これが「テロとの戦い」の最新型なのである。

自衛隊も「ゲーム」に参加？

近未来、もし憲法9条が改悪されて自衛隊が米軍と一緒にイラクやアフガン戦争を行うようになった時、実戦経験が少ない自衛官が、テレビ画面を見ながらミサイルのスイッチを押しているかもしれない。日本人にはテレビゲームが得意な人が多い。無人戦闘機だけではない、今は「戦争ロボット」「無人戦車」が

画面を見てミサイル発射



開発されている時代である。自分たちは安全な場所にいながら「テロリストたち」を殺害する戦争が、進行中である。有人戦闘機でも、タリバンやアルカイダだと勘違いして、普通の農民を爆撃する米軍。これが無人になれば、さらに「誤爆」するだろう。まして、「人を殺したという実感のない」空爆。

「ついでにこの村も空爆しておけ」。コーヒーを飲みながら、殺人ができるシステム。

オバマ大統領は、アフガン戦争を「大義のある戦争」と言う。（ノーベル賞受賞演説）こんな戦争のどこに大義があるのか？

このような戦争を拡大するのなら、「ノーベル平和賞返還請求運動」を起こさねばならない。

常岡さんの拘束事件について

花冷えのする4月2日、テレビ各局、新聞社数社から、一斉に電話がかかって来た。

「西谷さん、今どこにおられますか？」「日本です」「ああ日本ですか」。

ミャンマーで凶弾に倒れた長

井さんのときもそうだったが、マスコミはまず「そのフリージャーナリストが誰であるか」を確かめるために電話をかけてくる。西谷ではなかった…。では誰なのだ？



「常岡さんは拘束される前、ジャララバードを訪れていた。このキャンプにも足を伸ばしたことだろう」（ジャララバード、チャンタラ避難民キャンプにて）

「西谷さん、今アフガンに入っているジャーナリストで知り合いはありますか？」

「さあ、思いつくのはアジアプレス社のSさんやフォトジャーナリストのMさんくらいですかね」

しばらくして、行方不明者が判明した。長崎県出身で元テレビ局勤務、現在はフリージャーナリストの常岡浩介さんであった。

現地人に同化したタリバン側から取材

常岡さんの今回の取材スタイルは、「現地人に化ける」ことだった。アフガンの民族衣装を着込み、ヒゲをはやし、ムスリムであることを告げる。そこでタリバン側の信頼を得て、北部クンドウズ州のタリバン支配地域から、この戦争の実態を取材しようと、果敢に挑戦したのだと想像する。

この方法は、イラクでは通用しないがアフガンでは有効である。なぜか？

イラク人（アラブ人）は、パッと見て日本人の顔と違うので日本人が現地衣装を着ていても

「自己責任」バッシング起きないことを願う

この種の事件が起こると、日本では「自己責任論」が蒸し返される。かつて04年の人質事件のようなバッシングはさすがに起きないと思いたいのだが、「そんな危ないところに行くな」「迷惑な話だ」など、戦場ジャーナリズムを攻撃する論調が出てくるだろう。

一方で「現場に行かないと分からないじゃないか」「国民の知る権利に応えようとした立派な行動だ」と擁護してくれる意見もあるだろう。

正直、私は今回の常岡さんのこの事件については「やりすぎたのでは？」と感じている。しかしその行動を責めることはできない。うまく行けば「世紀の

大スクープ」を拾えたかもしれない。米軍の殺戮を被害者の側から撮影できたかもしれない。そうならば、「アフガン戦争をすぐに中止せよ」という世論を構築することができただろう。そしてまさにそのことが常岡さんの狙いであった。

つまり紙一重なのである。私がかつてやっていることも、彼が行ったことも、批判と評価がないままになった状況の中で、「やり通すしかない」のだ。

解放を遅らせる民間人の殺害

そんな水面下の交渉が続く中、アフガンのカンダハールで、民間人の乗った乗り合いバスがNATO軍に銃撃された。北部クンドウズでも同様の事件が頻発している。カンダハールもクンドウズも、タリバンの拠点。こんな事件が続くと、解放交渉の壁が高くなるばかりだ。

このニュースが発送される頃には、人懐っこいひげ面の常岡さんが満面の笑顔で出て来てくれればいいのだが。

GOBAKU

わざと間違える？ 誤爆

現在、2008年から10年にかけて取材した、アフガン・イラクの映像をDVDにまとめている。今回のDVDの名称を、GOBAKUにしよう

考えているが、それは米軍の、いわゆる「誤爆」に関して、「本当は誤爆ではないののではないか」という疑いを込めた批判である。

アメリカは実際に数々の誤爆を繰り返し、無辜の市民を殺し



「米軍の車列に近づきすぎて撃たれた遊牧民の少年（カンダハールにて）」

続けている。現地で誤爆の被害者に出会い、取材するうち、私は米軍の方針は「わざと間違えている」あるいは、「間違えても構わないからできるだけたくさん爆撃する」というものだと思えるようになった。

イラクでは04年頃からの凄まじい空爆で、武装勢力の蜂起を引き起こし、結果としてそれが内戦につながった。またスンニ派・シーア派がいがみ合うように、わざと治安を守らずに、テロを誘発させた。

アフガンでは07年頃から不必要と思われるほどの執拗な空爆を、アフガン・パキスタン国境地域で繰り返したため、結果として農民がタリバン化し、タリバン勢力が復活した。

イラクやアフガンは、米軍の言う「不安定の弧」の中心に位置するが、「不安定の弧」を「不安定なまま保つ」のが米軍の戦略なのではないか、という疑惑である。

イランを囲い込むように基地を

戦争中毒国家アメリカが、次に狙いを定めているのは、おそらくイランである。イランに続いて重要なのはカスピ海周辺の中央アジア。

イラクで航空自衛隊は何をしていたか

— 憲法9条1項違反の実態 —

5年にわたる「黒塗り・不開示」とのたたかい

あきらめないことの大切さ。

昨年秋、このことをあらためて思い知らされる出来事にめぐりあいました。9月24日付で、航空自衛隊「イラク復興支援派遣輸送航空隊」の「週間空輸実績（報告）」が全面開示されたのです。

政権交代後もなく実現した安全保障にかかわる情報公開という注目をあび、全国紙がいつせいにこのことを報じましたが、わたしたち「イラク派兵差止訴訟」をたたかった仲間にとつては、とりわけ思い入れの深い文書の全面開示でした。

何よりそれは、自衛隊イラク派兵の「違憲」確認を求めるとともに、ぜひとも必要な文書のひとつでした。しかし、裁判がはじまった当初、情報公開請求を行った原告のひとりに対してはじめて防衛庁（当時）が返してきたのは、真っ黒に塗りつぶされた「黒塗り・不開示」文書でした。以来5年。開示請求と不開示にたいする不服申立をくりかえし

アフガンを不安定化し、イラクを内戦状態に追い込んでおけば、それぞれその地に駐留する反米国家イランを挟み込むように、巨大な軍事基地が作られる。「沖縄が台湾海峡に近く、「かなめ石」の位置にあるので、普天間は県内に移設されるべきだ」という理屈以上に、イラクとアフガンは、米軍にとって重要な位置にある。

イラクやアフガンが安定し、強力な政権ができれば、イラク人やアフガン人の意思が、「米軍撤退」に動かないようにするにはどうすればいいのかわか？

答えは簡単。そこに「強力な政権」を樹立させず、混乱させ、国民の意思が反映しないような政治状況を作ればよい。

敗戦直後の日本が、労働者の総決起で、新しい態勢を作ろうとしたときに、弾圧を加えてきたのは占領軍であった。

日本が真に独立するためには、米軍を撤退させなければならなかった。しかし日米安保が結ばれ、米軍は駐留し、その犠牲の大部分を沖縄に押し付けた。

同じように、おそらくイラクやアフガンで「イラク・アメリカ安保」「アフガン・アメリカ安保」のような条約が結ばれ、イ

ラク・アフガンの基地は残されるだろう。そんな長期的な視野に立てば、今のアフガンは「混乱させる時期」。そう考えると、「誤爆」「誤射」は、米軍のトップにとつては「想定内」であろう。

反戦世論こそ米軍追い込む道

そんな米軍を窮地に追い込む方法は、ただ一つ。国際世論だ。これ以上「誤爆」という名の意図的殺人を繰り返させてはならない。核兵器廃絶を述べるオバマが、無人機による空爆を強力に押し進めるといふダブルスタンダードこそ、今のアメリカの本質。北朝鮮やイランの核は声高に非難するが、イスラエルの核については黙認するアメリカ。どちらの核もいらぬし、そんなダブルスタンダードこそ、紛争を助長してきた根本原因なのだ。

誤爆とGOBAKU。あえて「GOBAKU」と名付けたのは、「知っててやっていると違うの？」という意味を込めているからなのだ。

（仮称）GOBAKUは、6月下旬発売予定。詳細は次号で発表します。

この日にあわせて、誰もが活用できる簡単なテキストを編もうと思いつき、ブックレット『イラクで航空自衛隊は何をしていたか—憲法9条1項違反の実態—』（同封チラシ参照）を刊行しました。「週間空輸実績（報告）」を名古屋高裁判決の違憲判断に照らして考察したものです。グラフや図表をふんだんに使いました。

わたしたちの「加害責任」を問わずに歴史を前にすすめることはできない

イラク戦争が国際法違反であることは、国際的コンセンサスです。その前線において、いかなる犯罪や非人道的行為、人権蹂躪がくりかえされたかについても、すでに多くのメディアや刊行物、ドキュメント映画やDVDが伝えるところですが、わたしたちは、それらの違法・非人道的行為に、空自の輸送活動を通じて加担しました。その「事実」を知ることなく「責任」を問うことなく、歴史を前にすすめることはできません。

開戦直後、この戦争をまっさきに支持



（著者 大垣 さなゑ）

た人たちの努力があつて、ようやく全面開示にいたつたという経緯があつたからです。開示された文書はA4判およそ400枚におよぶ「報告」記録です。これによつて、2004年3月～08年12月まで5年間にわたつたイラクへの輸送活動の実態を知ることができるようになりました。しかもそれは、憲法違反の事実と実態を具体的に証してくれる、貴重な記録文書であり歴史資料でもありました。

このめぐりあいを無にしてはいけない。そういう思いに動かされ、心ある方々の協力を得てデータ処理をはじめました。

名古屋高裁の違憲判断に照らし合わせて

「イラク空輸 全面初開示」 「空輸実績 兵士が71%」「米軍 1万8000人、銃5000丁」……。全面開示を報じた各紙の見出しはおおむねこのようなものでした。

報道にふれたとたん脳裏に去来したのは、わたしたちが運ん

「イラクと被曝」

シリーズ 3

劣化ウラン弾

劣化ウランは、放射性物質であり比重の重い金属物質であることが特徴である。それらの性質は、「劣化ウラン弾」となった時に、悲しい実力を発揮する。原子力発電の負の生産物である劣化ウランは、第一にとっても低コストな資源である。第二に、その比重が重いという性質から、対戦車砲としても威力を発揮する。

劣化ウラン弾は、戦車にぶつかると3000～4000度の高熱を出し、装甲を溶かす。その後、車中で激しく燃え、中にいる人間を炭化させるほどにまで内部を焼き焦がす。この際、劣化ウランはエアロゾル化(煙霧状化)し、気体となって拡散する。劣化ウラン微粒子は、たばこの煙の微粒子よりも小さい。その微粒子一粒一粒が、酸化された重金属であり放射性物質なのである。目に見えないそれらは風に乗って運ばれ、広範囲にわたって土地や人を汚染してしまう。

劣化ウランの危険性を示す、カクテル効果というものがある。カクテル効果とは、放射性毒性と科学毒性が一緒になると、相乗効果が生まれ、突然変異を導く

効果のことである。エアロゾル化した劣化ウラン微粒子の、酸化された重金属であり放射性物質であるという性質が、お互いに刺激してより危険な物質になるというのである。

湾岸戦争帰還兵やイラク・アフガンの間で、四肢形態異常児や先天性欠損症の子どもが多く生まれるようになったのも、このエアロゾル化した劣化ウラン微粒子を体内に取り込んでしまったことが大きな原因ではないかと考えられる。まず、その金属毒性から、水俣病で知られるように、奇形児や異常出産を増加させる事ができる。また、活発な細胞分裂を繰り返す受精卵や胎児の細胞が、放射性毒性によって異常をきたすと、修復が追い付かないままに分裂を続ける。その結果、おかしい細胞たちは、体の各部位や内臓の形成を間違えてしまう。この、劣化ウランを含有する対戦車砲を保有している国の中に、残念ながら日本は名を連ねている。

近藤麻衣(大阪YMCA)

『イラクの子どもを救う会』事務局便り ⑤

先日は、皆様よりご送金頂いた際の郵便払い込み票2～3月分100枚以上を整理しました、いつもご支援、本当にありがとうございます。そしてその通信欄にありますメッセージには、励まし、応援、平和への祈り、西谷さんの健康へのお気遣いのメッセージ、ニュースレタNo.22の感想などいただき、本当にありがとうございました。そして今回は西谷さんが新たに出版した本の感想もあり、早くも少しずつ広がっているなって知りとても嬉しく思いました。もし新刊にご興味がありましたら、是非、手にとって読んでみてくださいね、よろしく願います。会のオンラインショップでも取り扱っております。(釘嶋)

イラクの子どもを救う会 オンラインショップ

検索

これから日本は美しい季節を迎えます、様々な想いがありますが、楽しく過ごしましょう。



「オバマの戦争」好評発売中

「西谷文和の戦争あかんシリーズ」として、これまで①「報道されなかったイラク戦争」②「戦場からの告発」を出版してきましたが、このたびシリーズ3作目「オバマの戦争」を上梓することになりました。

アフガン編では、09年6月と10月のアフガンの状況やタリバンの正体、現在進行形で殺されて行く人々の嘆きなどを描いています。イラク編では09年3月のバグダッドの様子、劣化ウラン弾被害の子どもたち、モスル近郊の病院の様子、ごみ処分場で生活せざるを得ない難民たちの状況などを書きました。

アフガン戦争とイラク戦争の今がわかるブックレット、A4版64ページで1冊600円です。ぜひお読みください。



募金のあて先

- ① 三井住友銀行 吹田支店 普通 3712329
イラクの子どもを救う会 西谷文和
- ② 郵便振込 00970-5-222501
イラクの子どもを救う会

【お知らせ】

- ・ニュースレター配布停止は 御手数ですが、当会までお知らせ下さい。
- ・DVDジャーナダーイラク 民衆の闘い」の感想を引き続きお待ちしております。
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-19-14 FAX: 06 (6875) 8980
(昨年7月に移転しました) メールはこちら office@nowiraq.com